

石段に鉄管

小川未明

青空文庫

秋の暮れ方のことでもあります。貧しい母親が二人の子供をつれて、街道を歩いて、町の方へきかかっています。二人の子供は男の子でした。上が十一ばかり、そして、下は、まだ八つか、九つになったばかりであります。

彼らはどこからきたものか、疲れていました。ことに二人の子供は足がぐたびれたとみえて、重そうに足を引きずっていました。

兄のほうは、それでも我慢をして、先になつて歩いていました。弟のほうは、母親のたもとにすがったり、その体をまわったりして、ときどき、黙つて歩いている母親の顔を仰いで、苦痛を訴えるのでした。

「ああ、もうすこしいつたら、休ましてやるよ……。」と、母親はいいました。

三人は、あまり、おそくならないうちに、町へはいりたかったのであります。しかし小さな子供は、足が痛んで、どこでもいいから休みたかったです。

街道をいくと、傍に大きな屋敷がありました。道からすこしく高いところに、その家は建てられていたのでした。そして、石段が通り道から、そこまでついています。石の上は白く乾いて、しめつた黒っぽい土の面から浮き出ていました。

「ここへ腰かけて、休んでいきましよう……。」

哀れな母親は、二人の子供を見まわしていいました。そこで母親を真ん中にして、兄は左に、弟は彼女の右に腰をかけたのであります。

みすばらしい着物は、ほこりにまみれていました。秋の晩方の空気は、ひやひやとして肌を迫り、木立の葉は色づきはじめて、日は、林のあちらに落ちかかっています。三人の前には、さびれていく田園の景色がしみじみとながめられたのです。年上の子供は、黒い瞳をこらして、遠方をじつと物思わしげに見つめていました。どんなことを頭の中にかけていたでしょう？ 弟のほうは、母親の体によりかかって、これとて無心でいました。日が暗くなつた時分に、どうするかということも……、また今夜は、どんなところに宿るだろうということも、また、もうすこしたてば、いまそれほど感じていないひもじさを訴えなければならぬということも知らぬげにみられました。けれど、哀れな母親には、とつくにそれがわかつていて、こうして休んでいる瞬間にも、胸を苦しめていたのであります。

この三人は、石段の下から二、三段上のところに並んで腰をかけていましたが、その前をいく人通りもまれとなつたのです。ちょうど、母親が、切れかかったぞうりの鼻緒

を直なおしていたときです。石段いしだんの上うえから、男おとこが、憎にく々にくしげにどなりました。

「ここは、乞食こじきの休やすみ場ばでない。さあ早く、あつちへいくんだ！」

男おとこは、両手りょうてを振ふつて、三人にんを迫おいやるような手てまねをしました。

二人ふたりの子供こどもは、すぐには、起たてなかつたのです。なぜなら、腰こしを下おろすとともに、疲つかれが一時じに襲おそつて、小ちいきな足あしは、重おもくて、痛いたかつたからでした。母親ははおやは、ぞうりをまだ手てに持もつていました。

「早く、うせんか。ここは、おまえがたの休やすみ場ばでないぞ！」

男おとこの権幕けんまくが怖おそろしかつたので、三人にんは石段いしだんを離はなれて歩あるき出だしました。兄あには、じつと男おとこの顔かおを振ふり向むいて見みていました。弟おとうとは、石いしの上うえにただ腰こしをかけていることがなんで悪わるいのか？ なんでしかられなければならぬのか？ それが、不思議ふしぎで、不思議ふしぎでなりません。それで弟おとうとは、振ふり向むいて、いままで自分じぶんたちが腰こしをかけていた石段いしだんのあたりをながめたのです。石いしは白しろく、なんの変へん化かもなく、ぼんやりと乾かわいた色いろのままに浮うき出でてきました。

「お母かあ、なんでしかられたんだい。」と、弟おとうとは、うつむいて歩あるいている母親ははおやにたずねました。しかし、母親ははおやの答こたえは、子供こどもの耳みみには聞ききとれないほど、口くちの中なかでその声こえはつ

ぶやいたのです。

「なんだい、そんな石段……、減りはしないじゃないか？」

兄のほうの子供は、たまりかねて、十間も歩いて、こちらへきた時分、男のいる屋敷のほうを見て叫びました。男が、石段が減る心配以外には、なにも自分たちをしかる理由がなく、また、自分たちはしかられるはずがないと思つたからです。

母親は、やはりうつむいて歩いていました。二人の子供は、それから、しばらく黙つて、おとなしく歩いたのです。

あちらに、町の灯が、見えてきました。

もう、日は、暮れてしまつて、西の空には一日の余炎もうすれてしまいました。そして、ものの蔭や、建物の蔭に、闇が暈取つていました。水道工事があるとみえて、鉄管が道ばたに、ところどころ転がっています。

三人は、うす暗い、建物の壁にそつて歩いていました。その電信柱の下にも、長い機械のねているように、大きな鉄管が転がっていたのです。それは、三人が、またれかかつて休むのに、ちょうど適當のものでした。

「ここで、休んでいこう……。」と、母親は、二人の子供にいいました。

「こんな暗いところは、いやだなあ。」と、弟はいいました。

鉄管は、ここばかりでない。ずっと町の方まで、ところどころこうして置かれてあるからでした。

「ここで、休んでいこう。」と、母親は、くりかえしていいました。

彼女は、明るい場所で休むと、まだだれかにしかられはしないかという不安があったからです。そして、この母親の心持ちを年上の子供だけは、悟ることができるのでした。

「ああ、ここで休んでいこうね。」と、年上のほうの子供は、いって、母と並んで、冷たい鉄管に疲れた体をもたせかけて、なおもはい上がって腰かけようとしていました。年下の弟は、町の方にきらきら輝く灯をながめていましたが、

「こんなところは、いやだ。もつと明るい方へいって休もうよ……。暗くて、いやだ。」
 といいました。

「そんなこといわんで、ここへきて、ちつとばかり休みな。」と、母親は、諭すようにいいました。けれど、弟は、明るい方ばかり見えて、母親のいうことを聞きませんでした。

「明るい方へ行って、休もうよ……。」

母親が返事をしなかつたので、

「町の方へ行ってから、休もうよ……。暗いところはイヤだ。明るい方へ行って、休もうよ

。」と、小さな子供は、体をもだえていいつつげました。

「明るいところへ行って休むと、また、しかられるぞ。」と、兄はいいました。

「うそだ……。うそだ！俺ら、暗いところはイヤだ……。」

冷酷な建物の蔭になっている暗いところで、しかも冷たい鉄管の周囲で、哀れな

三つの影は、こうしてうごめいているのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

初出：「文芸戦線」

1924（大正13）年12月

※表題は底本では、「石段《いしだん》に鉄管《てつかん》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

石段に鉄管

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>